フランス見たまま
(2)

山田正春

パリーには南郊のオルリー（Orly）と北郊のル・ブールジェ（le Bourget）の2つの空港がある．　オルリー空港は　フランス航空（Air France）等　フランス国営の航空機の発着のみに使用されるので　その他の航空機はすべて　ル・ブールジェ空港に発着するわけである．そして　いずれの場合も　中心部のアンバリッド（Invalides）のターミナルまで専用バスの便がある．

はじめての海外旅行には　かなりの不安をともなうのは　誰しも経験することであろうが　筆者も多聞にもれずずいぶん余計な心配をして　パリー着の時もパリーの日本大使館に勤務する知人に出迎えを依頼しておいた次第である．　コペンハーゲンで乗換えて　1960年12月4日午後3時　ル・ブールジェ空港にパリーの第1歩を印した時　残念ながら非常に悪い印象を受けてしまった．それというのは　空港で入国手続をすませ荷物を受取る時税関吏が“アメリカの方ですね”等とお世辞をいいながら皆フリーパスにしているのに　筆者と読売新聞の込山氏の2人のみには　荷物を全部あけさせて　いちいちこれは何だとしつこく調べられたからだ．　もともと仏語がすきで長い間勉強した事もあって　フランスの小説映画美術品等もよくみて　いわゆるフランスムードにはかなりの好感を持っていたのに　入国早々不愉快な目に会って後々までも抜き難い悪い印象を受けてしまったような気がする．　それはさておき知人の車で　ル・ブールジェ空港から都心に向かう折　まったく落葉したマロニエの並木路や　建物　道行く人々等すべてに寥々としたものを感じながら　また映画館に行列する人々を異様に思ったりして　はじめてみるパリーのまちを興味深く観察した次第である．　さらにホテルを予約して待っていてくれるもう一人の友人と落合うべく　アンバリッドのターミナルに着いて友人を捜した所　片すみで年輩のフランス人とフランス語で　さかんに話し込んでいる友人をみつけ　1年ぶりの再会を喜びながらも　あんなにうまくフランス語が話せるかなあと　多少の不安にかられた次第である．

ただちにブールゴンニュ通り（Rue de Bourgogne）のブールボン宮ホテル（Hôtel du palais Bourbon）というすばらしい名前のホテルに落ついた．　この辺はブールボン家の邸であったのが　ホテルの名前の由来となっているとかで　正面には今はフランス国民議会となっているブールボン宮があり　フランスの霞ケ関とでもいうべく農林省をはじめ多くの役所があり　またロダンの生家も近くにある．　その夜　はじめてメトロに乗ってオデオンの中華料理屋に行き　純中国風の料理を食べてホテルに帰り第1日の就寝についた．

翌5日（月）には私を招待してくれたフランス大蔵省の担当課であるA. S. T. E. F（Association pour l' Organisation des Stages de Techniciens Etrangers dans l' Industrie Française）に出向いて　パリー到着の挨拶　所定の手続　身分証明書の交付を受けるなどすべての手続をすませ　ついで警視庁に外国人登録をし

パリー南郊のアルカィユ・カッシヤンにある9階建（フランス式にいえば8階建）の新しいアパルトマンで　筆者はこの左はしの4階12号室に住んでいた

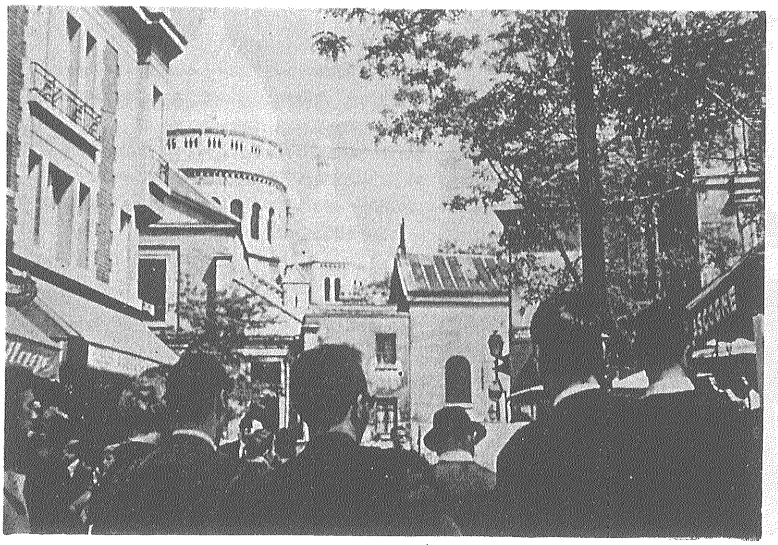
カッシヤンの国営外国人技術者専用のアパルトマン
（人物は山田技官）

さらに　日本大使館に行き　堀一等書記官はじめ領事等に挨拶しいよいよパリーの生活に入ったわけである.

パリーは物価高で　かなり暮しにくいと聞いていたがまさにしかりで　手帳を買ったら500円以上も取られてびっくりした.　ホテルも高いのでただちに外国人技術者専用のアパルトマンに入居の申込みをし　13日からパリー南郊のカッシャン（Cachan）のアパルトマンに入居する事ができた.　一寸不便ではあるが新築で　食堂も完備しており　数名の日本人もいてまずは落ついた次第である.　ここは8階建のかなり立派な建物で　入居者の約半数がアフリカ諸国の黒人であるが　その他中近東の人々もかなりいた.　値段は1日5新フラン（365円）で食費は市価の半値以下と安く　まずはフランス政府からの給費額月750新フラン(54,750円)に見合った生活を確保してやれやれといった次第である.　12月はまずソルボンヌに通う事になり　毎日国鉄ソー線に乗って通勤したが　夜も7時からソルボンヌの文学部で外国人技術者のために開かれている会話クラスにも出た.　その間ひまをみてはB. R. G. Mにも行って鉱床関係の部屋に顔を出し　とくにNi, Cr, Mn研究室でJ. Bouladon技師のCr鉱床に関する研究成果をみせてもらったりしたが　そんな次第で非常に多忙な毎日がつづいた.　また12月8日には欧州地球物理連合学会に講演のためパリーに来られた　地質調査所物理探査部早川課長にも会って久し振りの会合をよろこび　一緒に堀一等書記官宅をはじめ知人に招待されたりした.

パリー滞在中はフランスを知るために休日を利用して歴史的に著名な記念物を訪れたり　A. S. T. E. F. 主催の工場見学等にもつとめて参加した.　しかしパリーで開催されると聞いていた　D. R. E. M. 主催の研究会がリモージュ（Limoge）北方のラゼス（Razès）で開かれる事となったので　パリーの生活も　約一ケ月で終り1961年1月6日パリーのオーステルリッツ駅発特急でリモージュに行き　その北方約20kmにある人口約2千という小さないなか町アンバザック（Ambazac）に移った.以後の生活はすでにのべた通りである.　中部フランスは歴史的にも　風俗習慣についても非常に興味ある所であるが　これらについては稿を改めてのべる事とする.

フランスの気候の大きな特長は　11月から2月までが雨期で　決して大雨は降らないが　毎日小雨がそぼ降りまず太陽をみる事はまれである.　そして3月から10月までは　日本のようなつゆもなく　すみきった青空のつづく好天気で　マロニエやリラをはじめ多くの花が咲く春が長く　夏は湿気が少ない快適なもので　まずは乾期といえる.　したがって秋から冬にかけては　街路樹がすべてマロニエ等の落葉樹であるため　小雨降る並木道に落葉を掃除する人夫が出て　一寸ものさびしさを感ずる.　日本でもよく愛用されるベレー帽は　フランスの気候によって生れたものであるが　これについてのべてみよう.　ベレー帽はフランスの西海岸スペインに近いバスク（Basque）地方で生れたものである.　バスク地方は歴史的にも民族学的にも重要視されているが　とくにその起源について種々の説があった.　しかし現在ではスペインに古くから入っていたイギリスのケルト族がサラセンのスペイン征服の時に追われてすみついたものであるとの説が有力である.　バスク人が雨を防ぐためにベレー帽を生みだしたのであるが　今ではフランスの屋外労働者が小雨から体を守るために　レインコートを着てベレー帽をかぶって作業するわけで　ベレー帽は防水してあるのが普通である.　そんな次第で　インテリ



モンマルトルの丘

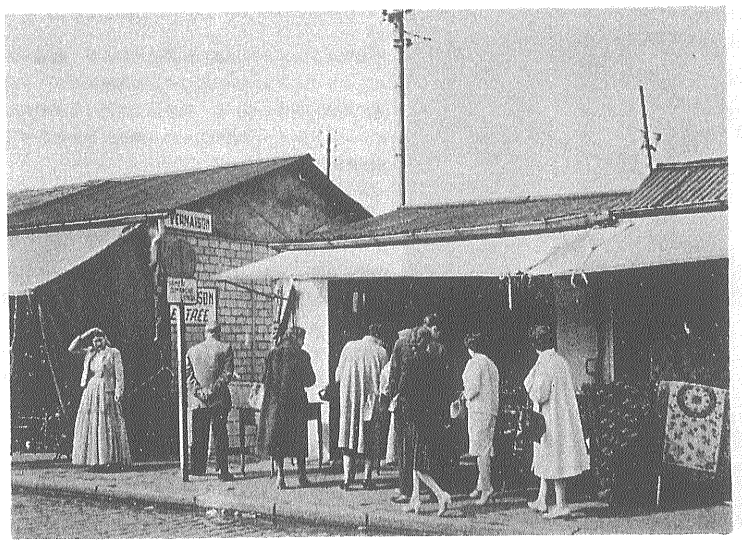
有名なモンマルトルは夜の歓楽街であるが　劇場・ナイトクラブ・キャバレーはこの丘の南側面ピガール広場の周辺に集中している　丘の頂上付近は写真中央のサクレ・クエール寺院の堂々たる偉風にかかわらず田園的風ぼうを保っている
モンマルトルとは「殉教者の丘（モン・デ・マルティール）」から出た名前でここで聖テルテール聖ルュスティックが殉教した
サクレ・クェール（Sacré-Coeur）はハビサンチン・ローマの模倣で最初の寺院は1870年の戦争後　国民議会がサクレ・クェールのため　巨大な寺院をたてることにきめた
完成は　1919年10月16日　工費4,500万フラン　43年間の大工事であった

はベレー帽を使用せず労働者の作業用となっているので日本で愛用されているのとは　根本的におもむきがちがうわけである．　したがって日本のベレー帽愛好者もフランスに行かれた時は　ベレー帽を使用しない方が無難である事を参考までにつけ加える．　大体湿気は少なく夏も木蔭に入ればまず涼を感じ　冬も底冷えを感ずる事はない．　気温は東京より幾分高く　1960～1961年の冬にはパリーでは雪も降らず　冬オーバーもほとんど不用であった．

日本でフランス料理といえば　一般に美味で味覚を満喫させるものであるとの印象を持たれている．　しかし本場の料理は　カロリー　栄養価はすばらしいが　味はお世辞にも上等とはいえない．　普通　料理に味をつける事はめずらしく　塩と胡椒をふりかけて食べる訳である．　したがって香料は大切なもので　中世以後欧州人が海外に雄飛したのには　種々の理由があるが　その1つに香料を求めてがあり　これはすべて食事から出発しているのである．　朝食は　いわゆるコンチネンタルスタイルで　クロワッサンと称するパン2コに　カッフェ・オー・レ（Café au lait）というミルクを入れたコーヒーで簡単にすます．　しかし昼と夜は　量の多い事は驚くべしで　普通5～6品（スープ　肉　ジャガイモフライまたはマカロニか　米　サラダ　チーズ　果物）のコースで　量は日本の3～5倍　そして内容から想像してカロリー栄養価はそれ以上であろう．　なれないうちは　このまずくて味のない料理を持てあますが　1月もたてば結構なれて全部たべるようになる．　スープはまずまずだが　チーズは物すごい悪臭を放ち　しつこい事おびただしい．　サラダにはオリーブ油と酢の一種とを混ずるが　一寸なれないと食べられない．　肉は厚くて大きいのをただ焼いただけで何の味もなく　とくに羊となると悪臭と独得な繊維の太い肉で一寸食べられない．果物は　バナナとオレンヂはすばらしく値段も日本の1/3位と安いが　リンゴは悪く日本ではとても売れないような代物である．　全部のコースが終るのに1時間以上が普通で夜などはまず2時間はかかる．　この間大いにおしゃべりして楽しんでいる事はすでにのべた通りである

大体フランスの気候は非常に乾燥しているので　必然的に油っこいものを取らざるを得ないのであり　日本のように湿気の多い国ではサラッとした淡白なものが好まれるのであろう．　とにかく食事は　欧州人が遊牧民族の子孫である事のほかに　気候条件も何らかの影響を与えているのではないかと感じられてならない．　なおフランスではブドー酒を実によく飲む．　おとなも子どもも食事の時はお茶代りに飲むのである．　大体町のレストランで生ブドー酒2～3合入りが10～20円と非常に安価である．　ブドー酒には さらに蒸溜したマルティーニ等の高級品がある事は勿論である．　筆者のようにお酒を飲めないものは水を要求するのであるが　エビアン（スイス国境のエビアンに産する良質水）等の上等の水は1本（4～5合）70円以上である．　大体パリーは石灰質の第3紀層の地帯に発達した都市であるため　天然水は非常に悪く　とくに石灰の含有量が多くて　水道の水をコップに取れば肉眼で見える程度の沈殿がある．もちろん水道の水を沸かして日本茶を入れても全く味がおちる．　聞く所によれば　日本と米国が天然水を飲める数少ない国とかである．

そんな訳で良質水に乏しいためにフランスの上水道には2種がある．　すなわち普通の水道と掃除等の非飲料用で日本のように上等の水を道路にまいたり掃除に使うものはもったいない事である．　したがって日本でもこ



パリーの北部クリニュアンクール（Clignancourt）の周辺では　日曜日にノミの市と称して中古品やコットウ品の市が立つ
旅行者や収集家たちはあれこれとめざす品々を探し求めてごったがえす　中世のころの品物も多い
この市を一廻りするのも楽しいものである　写真のように古い服装をした売子も興味深い

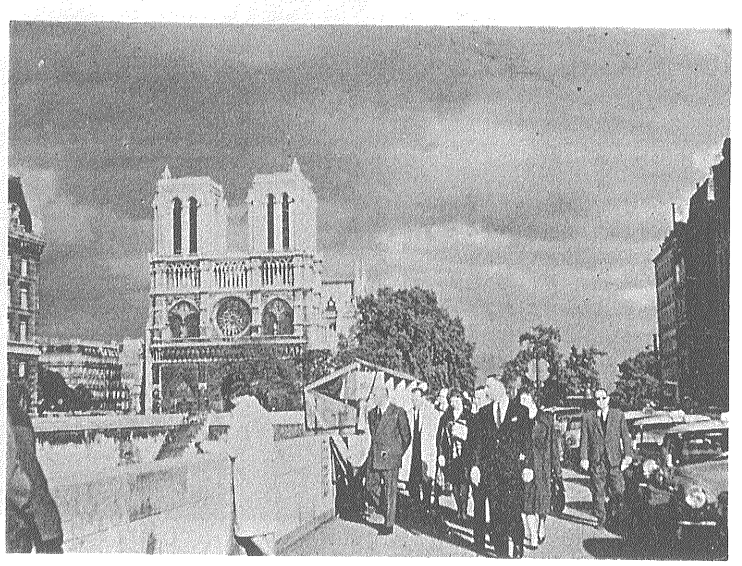
ノ　ミ　の　市（Marché aux Puces）

れを分けて後者には川の水をそのまま使うようにすればまず渇水の心配もないのではないかと考える次第である

フランスは　イタリー　スペイン　ポルトガルとともに旧教の国であるが　それらの国々が100％旧教であるといわれるのに対し　約10％の新教徒がおり　さらにごく少数の回教徒等もいる．　日本では宗教は単に家庭の宗教というのみで　お葬式や結婚式等に儀式として従うにすぎず　ふだんはおよそ宗教に関係のない人が実に多いが　フランスでも近来とみにこの傾向がふえつつある．　一説によれば　日曜日に必ず教会に行く熱心な教徒(プラチコン：pratiquant)は　約30％との事である．しかし熱烈な信者の多いブルターニュやノルマンディー地区等ではプラチコンが非常に多い．　滞仏中に会った多くの地質技師　技手のなかで　プラチコンはブールボンネ(Bourbonnais)の駐在所長リブロン(Riveron)氏1人のみで　あとの人々は結婚式や葬式の時だけですよといっていた．　この事は日本と同じく老人が非常に熱心で　ついで御婦人となり　20〜30代の人々は　教会のミサに行くのも少なく　子供達は単に親につれられていっているにすぎないのであろう．　新教の発生にゆかりの多いスイスのジュネーブで　かつて苦難の道を歩いたジャン・カルビン(Jean Calvin)等の話を聞くにつけ　たしかに旧教の矛盾を感じさせられる．　100％旧教のスペインでは　それが特に権力に結びつきかつ利用されて何か空虚さを感じられてならない．　筆者が会ったプラチコンにかつてわが国で起ったいわゆる“ベルメルシュ事件”について感想を聞いてみたら　“その事件は知っているがそんな事はあり得ない”と口をつぐむ次第だった．　いずれにしろ筆者の感じでは　年毎にプラチコンは少なくなって行くように思われる．　プラチコンの人々にとっては異教徒に対して　歴史的に有名な宗教戦争からみても判るように　表面は別としてかなり宿命的なものをもっているようで　異教徒との結婚等は考えられない．　結婚には市民結婚と宗教結婚があるが異教徒との結婚は教会で宗教結婚をする事ができず　したがって市民結婚をする訳で　そうなれば生涯夫婦揃って教会へ行く事はできない．　なお　フランスで約10％の新教徒は不思議な事に地中海岸のモンペリエ周辺に多くかたまっており　スイスやドイツ国境には必ずしも多くない．どうしてそうなったかは聞いてもよくわからないという事である．

わが国で一般に考えられているフランス観は　大体映画や小説の影響によるものが多いのであろうが　これは真のフランスの姿とはかなりちがうものである．　これらについては　おいおい述べるが　端的にいえば非常に質素で勤勉で礼儀正しく　家庭のしつけも実にきびしいといえる．　例えば節約の事についていえば　一流ホテルは別として普通のホテルの廊下燈等は自動点滅のものが多く　廊下にあるボタンを押せば10数秒点燈して自然に消える．　したがって夜長い廊下を行くには　ボタンを何回も押さねばならない．　日本のようにつけっぱなしの廊下燈等は考えもおよばない．　またレ・グレヅィウー(les Grézieux)の探鉱地で　トレンチ作業をみた時ハッパをかける穴をあけるのに　人夫が汗みどろで鉄棒を槌で打込んでいるのをみて　監督の地質技師に“どうして機械を使わないのですか？”と質問したら　“機械より人夫の汗の方が安いからですよ”と平然と答えてくれた．　さらに B. R. G. M でも D. R. E. M でもそうであるが　地質調査の方法別の単価が計算されているのである．　そしてこの調査には　どの方法が一番効果

ノートルダム寺院の前庭の広場の中心にパリ市の紋章のついた青銅の板がある　これはパリとフランスの各都市を結ぶ国道の出発点を示すもので　ここからすべての距離が計られる
また　ここは昔のリュテス（パリの前身）の街の中心で西歴前53年ローマ人たちがセーヌ河の岸辺に到達したときは漁夫や船頭の小さな集落であった　この寺はフランス史の記念碑であり　ゴチック芸術の一大傑作である　西歴375年にパリの最初のキリスト教教会として生れ　1163年にパリの司教エティエンヌ・ド・シェリーが建築家ピエール・ド・モントルーユ　ジャン・ド・シエル　ジャン・ル・ベーティユーに依頼して　現在のカテドラルの建築工事を請負わせたのである　寺院の2つの塔は左右対称でなく　南側の塔は488 kg の鐘の舌と総量13トンの釣鐘がある　はじめ1400年に鋳造されたが　1686年に改鋳され「エマニュエル」と命名された　この改鋳の際パリの貴婦人やマリア・テレザ王妃がおびただしい銀細工品を混入させた鐘の音が美しいのはこのためである



ノートルダム寺院

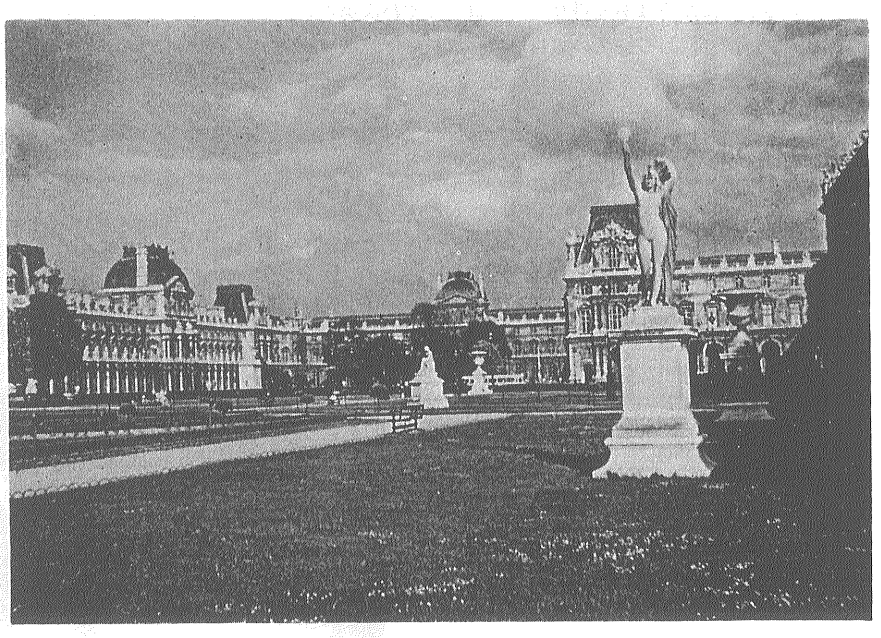
的であるかとともに　費用の安い方法を取るのが普通で物探より化深の方が安いからといって化探にきめる等は普通行なわれる事である．　日本とは会計法上のちがいがあるのであろうが　われわれには一寸びっくりする事でそれもほんの少しの差でも　より安い方法を取るのである．　ユーゴーの地質技師パンティッチュ君が“ソ連でこれこれの物探をみたが　フランスではやらないのか”と質問したら　“その方法は知っている　効果のある事も知っている　しかしとても高くつくのでフランスではやれない”と答えた事があった．

しかし質素ではあるが必要な娯楽には決してお金をおしまない．　例えばカジノ（Casino）等では　御婦人でも万単位のお金をルーレットやブールにかけて楽しんでおり　スッてしまえば悪びれる事もなくにこにこして帰って行く．　日本のように賭け事に抜き難い罪悪感を持ちながら　一部の人々のように一度足を踏みこめば熱中して家庭もかえりみない等といった図は想像もつかない．　余談であるが宝くじもあるが聞く所によれば前後賞とか２等　３等もなく　普通邦貨7,300万円の当りくじ１本のみで　庶民はそれにほのかな夢を抱いて買うようである．　礼儀正しいことも印象的で　例えば　通行中に一寸体にふれても必ず“失礼”とか“ごめんなさい”とかの言葉をかける．

フランス人の体格は欧州諸国中では小さい方で　身長においては日本より平均2〜3cm程度高い位との事であるが　なるほど日本人の中でも小柄な方の筆者より小さい人々もかなりいて決して劣等感を覚えない．　しかしボリウムは別で　とくに若い女性のハチ切れんばかりのボリウムはおどろきであるが　それも35〜40歳をすぎればすごいデブちゃんになってしまう．　そして老人は朝から公園のベンチで一日中ぼんやりしてすごす人が多い．これもゆきずりの旅行者からみれば　のどかで平和な一寸ばかりうらやましく思われる風景であろうが　事実は子供や孫と一緒の生活からのがれて1人さびしく1日をすごす人がかなりいるという事である．　老人の服装も日本の最近の老人の鼻息きの荒い生活からみれば　宗教的な関係もあろうが黒を主とした質素なもので　いかに日本の老人が幸福であるかしみじみ感ぜられてならない．

欧州の生活のテンポが遅く　のんびりした事はすでにのべた所であるが　例えばB. R. G. Mの地質技師に“ここは何省に属するのですか？”と聞いても知らないと答えるのがかなりいる．　実にのんびりした話である．逆にいえば日本のように　せちがらく　生存競争のはげしい国は　おそらく世界でも数少ないのではないだろうか．

フランスは中央集権の国でありまた国営の産業が多く学校もほとんど国立である事はすでにのべたが　放送関係もそうである．　ラジオ放送はすべて国営で　１局のみのテレビ放送もまた国営である．　番組はニュース　天気予報が多く　日本のように多くの民放が　もりたくさんの娯楽番組を放送するといったのとはちがって一寸殺風景である．　さいわい中仏以南では　モンテカルロのテレビ放送を受像できるので　ボクシング　プロレス等のスポーツ番組や娯楽番組を好んでみているようである．　ラヂオではよく正午の音楽に日本の歌を適当にアレンヂして放送していた．　花　春が来た　春の小川等



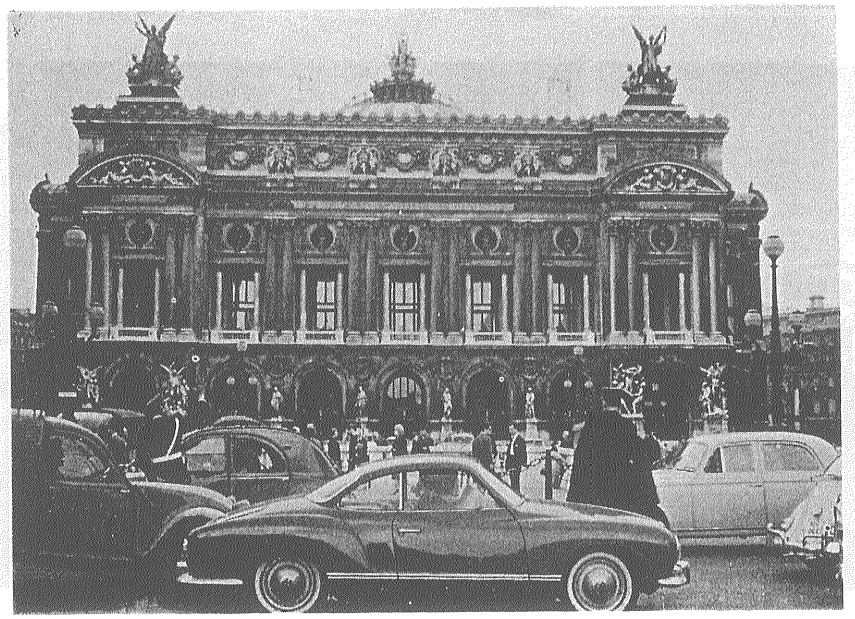
君主制の象徴ルーブル宮は世界で最も大きな王宮で　ベルサイユ宮やバチカン宮よりも大きい　壮大な187mにおよぶ廻廊は1687年に着工されたがルイ14世からベルサイユ宮の建築に身を入れたため工事は途中で中止されたこれをその後　ナポレオン一世が完成したナポレオンは諸国の王から贈られてくる美術品や　軍隊がイタリーから持ってきた美術品を容れる美術館としたがその仕事は甥のナポレオン三世が完成した　現在ルーブル博物館として有名である　日曜日は無料　平日は50サンチーム（約36円）で参観できる

ル　ー　ブ　ル　宮　殿

は特に好まれ　気軽に口ずさんでいるフランス人もかなりいた．　またテレビは　日本テレビと提携している事もあってニュースの後によく日本の著名な祭礼やニュースをみる事ができた．　一度新宿駅のラッシュの状況が出た時　一緒にみていたフランス人はすごく驚いていたが　とくに乗客の背中押し専門の学生アルバイトらしきものが出て来た時　“あれは何だ”というので　“乗客をつめるための学生の一種の内職だ”と答えるにおよんで彼等のおどろきは頂点に達した．　たしかにパリーのメトロのラッシュでもまず超満員という事はなく　乗れなくて残される人もまずない．　なおテレビセットはフランスではかなり高いが　それかあらんかテレビの普及率はわが国に比し問題にならない程低率で　レストラン等で集ってみている図は　わが国の数年以前とよく似ている．　電気器具による家庭の電化もはるかに遅れているが　とくに電気洗濯機の普及が極端に低く　普通手で洗濯する．　ラジオもトランジスターはあるが　かなり大型で値段も3～4万円以上である．　したがってわれわれ日本人の持っている小型2バンドのトランジスターラジオはあこがれの的で　ゆずってほしいと懇望される．カメラについても同じである．　カメラ　電気器具に関する限り　西欧諸国やソ連製のもの等多くみたが　性能と値段からみて日本製品の人気は圧倒的である．

昨年末　パリーで開催された世界柔道選手権大会で100年以上の歴史を持つ日本柔道が　世界選手権第4回目にして早くもオランダのヘーシンク選手に世界一を奪われた事について大きなショックを受け　いや油断したからだとか　ヘーシンクという1人のけたはずれの大男に負けただけだとか取沙汰されている．　しかし滞仏中に　欧州にはいかに柔道愛好家が多いかを　またいかに熱心に練習しているかをつぶさにみて　とくに欧州人の方が体格においてすぐれている点を考えれば　近い将来にこの事あるを容易に想像する事ができた．　パリー等では学校でもその他の団体でも半分近くに柔道愛好クラブがある．　そして帯も所によっては白帯と黒帯の間に赤　黄　緑　青　茶‥‥とずいぶん多くある事があってお互に少しでも上に行くのを楽しみにして練習にはげんでいる．　筆者の会った地質技師　技手の中にも柔道をやった事のある人がいくらかいたし　黒帯の人も1,2いた．　4カ月一緒に暮したポーランドの地質技師ザィアンツコフスキー君等は　東京オリンピックにそなえてポーランドでもとみに盛んになってきたといって　ポーランド語の柔道雑誌をみせ　ぜひ教えてくれと真剣に頼まれたのには閉口した．　とに角柔道が攻撃のためでなく防ぎょを目的としたものである点に好感を持たれているようである．　フランス選手権や欧州選手権大会は　テレビでも放送するので　よくみたが　レベルもかなり高い．　パリーで一緒にいた　フランスの柔道コーチをしていた天理大学の柔道教師の古賀氏も“はじめなめてかかって投げられ　肩を痛めたので　以後は非常に注意して教えている”といっていた．　いずれにしても　現在の状態では近い将来に　名実ともに欧州に柔道の実権を持去られる日がくるであろう．　アマ・スポーツ全般のあり方について　今こそ根本的に考えなおす必要がありまたその時期ではあるまいか．

（筆者は　鉱床部　非金属課）



オペラ座

オペラ座は　第2帝政時代にできた建物で最も重要なものである　1860年にオペラ座建設が決定し　178人の建築家が応募したが　一等賞を得たシャルル・ガルニエ（Charles Garnier）にまかされた　1875年にこけら落しをした　これは世界最大の劇場で　建坪11,000平方米以上　巨大な階段と出口を広大にしたため2,158の椅子しかない　オペラ座は原則として参観できないが　普通観光会社に頼むと便を得やすい　オペラ座の広場はパリの最も活発な交叉点の一つである